# かなしき女王

フィオナ・マクラウド　Fiona Macleod

松村みね子訳

青空文庫

# 目次


改訂版序 3
序言 5
飛鳥寧楽時代の政治的理想 9
推古時代における仏教受容の仕方について
仏像の相好についての一考察 37
推古天平美術の様式 47
白鳳天平の彫刻と『万葉』の短歌 61
『万葉集』の歌と『古今集』の歌との相違について
お伽噺としての『竹取物語』 73
『枕草紙』について 107
『源氏物語』について 121
「もののあはれ」について 163
沙門道元 181
歌舞伎劇についての一考察 195
307

ミストの島スケエの城の高い壁のかげに二人の男が縛られて倒れていた。

一人は「はげ」と綽名されたウルリック、一人は琴手コンラであった。多くの櫓船が海峡に沈んだ時、ゲエルもゴールも血に赤い波に沈んで、ただこの二人だけが生き残った。

長いあいだ二人は波の上に一本の同じ櫓(ほばしら)の上に揺られていた——それは「長髪」と綽名されたスヴェンが一艘ごとに二十人を乗り組ました櫓船二十を従えて北の島国から渡って来た「死鴉」の檣であった。

「無言」と綽名されたファルカは一艘に十人を乗り組ました四十の櫓船を以て彼に当った。

彼等は日が南にある頃から西に低くなるまで戦った。もう其時は「死鴉」と「掃泡」と二艘だけになった。この戦のあいだ、ウルリックはスヴェンの側に坐って死の歌と剣の歌をうたっていた。コンラはファルカの傍に在って勝利の威勢のよい歌をうたっていた。

多くの船が海中に血まみれの混乱の中に出会った時、槍は暴風の森の大枝小枝の如く上下した、人々の髪は血に真赤な顔と狂猛な眼の上にまっ黒くよじれて垂れていた、スヴェンは敵の「掃泡」に飛び乗って、自分に向って槍を突き出した槍手の首をちょん切った、首は海に墜ち込んで、首のない人間が中気のように顫(ふる)えて的のない槍をゆらゆらと動かしていた。

しかしこの働き中にスヴェンはよろけた、ファルカは彼に槍を突き通した。槍はスヴェンを檣に突き刺した。その時一本の矢が海を渡って来てスヴェンの眼に当った、彼はそれきり眼が

見えなくなった。「掃泡」が沈み、それに引かれて「死鴉」が沈み、二人の王は出会った、しかしファルカはもう其時はあっちこっちと揺り上げられる重い死魚のようであった、スヴェンはその死体を自分の愛していたガンヒルドの死体かと思って、それに接吻しようとしたが、彼を檣にくぎづけにした槍と七本の矢のためにそれも出来なかった。

月がのぼった時、水は真白に凪いでいた。海の中ほどを大きな影が北に向いて動いて行った、それは旅に行く青魚の数万の群であった。

「はげ」のウルリックが檣から沈みかけた時、琴手コンラはウルリックの髪の毛を持って引上げて息をつかせてやった、それでウルリックは生きていた。

二本の槍がそば近く浮いて来ても、どちらもそれを取ろうともしなかった。暫らくしてコンラは口をきいた。「誰だか私の足をひっぱっている、君の方の死んだ人間が私を沈めようとしているのだ」と彼がいった。ウルリックは長い息をついて、心臓を強くした、それから一本の槍をつかんで、それを下に向けて突き込んだ、槍は死人を突いた、その死人の髪がコンラの足にからまりついていたのだった、死人は沈んで行った。

二人は叫び声を聞いた時、船が又やって来たのかと思った。スヴェンの別手の軍かそれともファルカのかと思った。やがて二人は海から引き上げられて、星を見つめながら倒れて、それから後は知らなかった、物音が耳にむらがり入り、靄が眼にかかった、二人は恰かも舟を通りぬけて沈み、海を通りぬけて沈み、海の底の無限の空虚を通りぬけて沈み、そこに暗い星の下

にむなしく風に吹かれている二つの鳥のぬけ羽のようであった。

二人がさめた時はひるであった、一人の女が暗い顔をして彼等を見ていた。

女はたけ高く強そうであった、コンラよりも高く、ウルリックよりも強そうに見えた。長い黒い髪がその肩に垂れていた。肩も胸も両腿も青銅に包まれ、赤とみどりと交った上衣が右の肩にかかって、黄金の大きな襟止(えりどめ)で止めてあった。黄金の黄ろい頸鎖を頸(くび)に巻き、三本の尖頭(とげ)ある黄金の輪を頭に載せ、脚は鹿皮の革紐で巻いて、赤く染めた牝牛の皮で足を包んでいた。

女の顔は蝋のように蒼白く、この世のものでない恐しい美しさであった。二人は長く彼女の眼を見ていられなかった、その眼は暗黒のように黒く、その暗黒の中にさまよう赤い火焔があった。女の唇(くちびる)はやさしい曲線をなして、その顔の真白い中にほそい急な血の線のように見えた。

「私はスカアアだ」と彼女は長いこと二人を見ていてから云った。二人ともその名は知っていた、二人の心は石打つ者の前にいる小鳥のようになった。もし彼等がスカアアの前に在るのなら、ミストの島の女軍の女王の前に在るのなら、彼等は水中で死んだ方がよかったのだ。スケエの城の灰色の石は殺された捕虜の古い血で朽葉色に染まっていた。

「私はスカアアだ、お前方はロックリンのスヴェンとミドル・アイルのファルカか」彼女は問うた。

「私は『はげ』のウルリック」北国人が返事した。

「私は琴手コンラ」ゲエルが返事した。

「お前たちは今夜死ぬ」こういってスカァアは再び無言で立って、長いあいだ恐しい顔して彼等を見ていた。

ひる頃一人の女が牛乳と麋（となかい）の焼肉を持って来てくれた。その女はうつくしい顔をしていたが、顔を横切って切り傷の痕があった。二人は女に頼んでスカァアに生命乞いをして貰った。二人とも奴隷となって女たちに子だねを与えようといった。彼等もこの習慣を知っていた。しかし女は前と同じ言葉を持って来た。

「これは女王がクウフリンを愛するためです。クウフリンは詩人で、あなたたちのように歌をうたった、音楽も作った。黄ろい髪のあなたより、長い黒い髪のあなたより、クウフリンはもっと美しかった。それでもあなたたちは女王の心にむかしを憶い起させました。女王はあなたたちが死ぬ前に琴をひいたり唄をうたうのを聞こうとおっしゃる」とその女が云った。

夜が来て、露の落ちる時、ウルリックはコンラに云った「天馬リメメエンが星の中を駆けている、泡が彼の口から落ちて来る」

コンラは落ちる露を感じた。

「私が恋したのはこんな夜であった」コンラは息の下に云った。

ウルリックはくらがりの中でコンラの顔が見えなかった。しかし彼は低いすすり泣を聞いた。そしてコンラの顔が涙に濡れているのを知った「私も恋したことがある」彼はいった「私は沢山の女に恋した」

「恋には一つの恋しかない」コンラは低い声で答えた。
「私が今おもい出して考えているのはその恋だ」
「そんなことは、私は知らぬ」ウルリックは答えた「私は一人の女をずいぶん長いあいだ恋していた、その女がわかく美しかったあいだ中、恋していた。しかし或時、王の息子がその女に恋した、私は海ぞいの崖の上の森で二人を見つけた。私は女の体に腕を巻きつけて崖から飛び下りた。女は溺れて死んだ。私はかなしみの歌も作ってやらなかった」
「私の恋人の恋には月日はない」コンラは静かにいった。「彼女は星よりも美しかった」その大なる美のために彼は死も縛しめも忘れていた。
女兵どもが二人を海岸に引いて行った時、スカアアは砂の上にかがやき燃える大きな篝火(かがりび)の側に坐して彼等を見ていた。
彼女は二人が互に話し合っていた事を聞かされていた。
「お前の恋の歌をうたえ」女王はウルリックにいった。
「私は死に臨んで女のことなんぞ考えてはいられぬ」ウルリックは無愛想に返事した。
「お前の恋の歌をうたえ」彼女はコンラにいった。
コンラは彼女を見た、大きな篝火――その周囲には激しい眼つきの女たちが立って自分を見ている――大きな篝火を見た、それから息もしない静かな星を見た。露が彼の上に落ちていた。
その時彼がうたい出した――

時をして立ちて行かしめんか、いくさ車より解き放されし犬の如くに
時をして行かしめんか、火焔の眼を持つ白犬の如くに
もしいまだその時ならずば、星の下に我がためなおのこされしこの時に
いまひとたびわが夢をゆめみ、最後に一つの名をささやかん
そは、老年のためにわかさよりもなお美しく、若きものに生命よりもなおうつくしき、一人の人の名なり
彼女は美しきアンガスの初恋人よりもなおうつくしかりし、たとえわれももとせのあいだ眼しい耳しいたりとも、いかなるうた人のうたいし女よりも美しき彼女を見ることを得、風に乗りて響き来る歌のごとき彼女の声をきくことを得ん

沈黙があった。スカアアは両手で顔を支えて、燃える火を見つめていた。
スカアアは顔もあげず口をきいた。
「はげのウルリックを連れて行け」やがて彼女がいい出した、なお火をじいっと見つめる眼で
「誰でもあの男を欲しい者にやるがよい、彼はなんにも恋を知らぬ。もし彼を欲しい女が一人もなければ、胸に槍を突き通して容易く死なせてやれ」
「しかし、琴手コンラは、一つの事を知ったために凡ての事を知りつくしている、もうこの上

に彼の知るべき事はない、彼は我々よりも先の世界に踏み入っている、彼を砂の上に寝かして、顔を星に向け、その素肌の胸に赤い火の燃えさしを載せよ、胸が破れて死ぬように」

こうして琴手コンラは静かに死んだ、月にかがやく砂の上に倒れて、素肌のむねに赤い燃えさしと燃える火の焼け木をのせて、彼の上に光っていた星のようにしろく静かな顔をして。

# 青空文庫情報

底本：「かなしき女王　ケルト幻想作品集」ちくま文庫、筑摩書房
　　2005（平成17）年11月10日第1刷発行
底本の親本：「かなしき女王　フィオナ・マクラオド短編集」第一書房
　　1925（大正14）年発行
入力：門田裕志
校正：匿名
2012年8月23日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# かなしき女王

フィオナ・マクラウド　Fiona Macleod

2026年10月1日　第二版

## 奥　付

発行　　青空文庫

著者　　松村みね子訳
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/